

會 務

第十九卷第九號 昭和八年九月

編 輯 委 員 會

第八回編輯委員會

開催日 昭和八年八月十四日

出席者 委員 青木楠男君 岩澤忠恭君 久保謙君 沼田政矩君
關信雄君

協議事項

1. 第十九卷第七號所載下記論説報告に對し討議依頼先を決定す。

偏心壓力と剪力を受けるコンクリート部材の剪應力及附着應力

會員 工學士 加藤順吉著

Theorie der Roste und ihre Anwendungen. Drittel Teil

會員 工學博士 福田武雄著

發電水路の方式と水流速とに関する經濟的研究

會員 榎本卓藏著

2. 第十九卷第九號に討議及特許抄録追加並に參考資料變更の件

討 議

地盤軟弱なる大阪港に於ける築船岸壁及防波堤工事の特種工法に就て

會員 工學士 山内喜之助

特 許 抄 録

軌條間支柱の改良

混合セメント製造法

軌 條

路面輾壓機用梶取装置

平板測量器

コンクリート杭築設方法

參 考 資 料

前回到決定せる「Cincinnati 停車場改良工事」を第十號へ變更し「Antwerp 市 Schelde 水底隧道」を追加す。

3. 第十九卷第十號登載論文を次の通り決定す。

論 説 報 告

Theorie der Roste und ihre Anwendungen. Drittel Teil.

Von Dr. Ing. Takeo Fukuda, Mitglied.

水源としての地下水の利用に就て (第三編)

會員 吉田彌七

參 考 資 料

Cincinnati 停車場改良工事

(大石重成)

Rodriguez Dam の基礎に就て

(岡崎三吉)

4. 論説報告及彙報 (第七號) の謝禮決定の件。

夫々階級及金額を決定す。

二十周年記念事業小委員會

第二回創立二十周年記念事業小委員會

開催日時 昭和8年8月11日午後1時30分より

出席者 委員長 井上 秀 二君

委員 宮長 平 作君 小川 織 三君 大島 滿 一君 黒田 武 定君
萩原 俊 一君

副會長 大河戸 宗 治君 米 元 晋 一君

井上委員長より土木會館建設に關する調査並に草案等につき説明あり討議の結果寄附金額の想定は參拾萬圓以上は困難なるべしと然れども草案一の如く敷地を日比谷方面に選定する時は借地權に莫大なる金額をうばはれ従つて會館は小規模となるべく斯くては收支の償はざるは勿論却つて土木學會の眞價を毀損せしむるものなればむしる建設せざるにしかずとなし一時行憫みの状態となりしも黒田委員より秋葉原高架線下部の利用を提議せらるゝに至り再び局面は轉換し一同賛成の上速時現場の視察をなせり尙同所利用に關し鐵道方面の意向を確めたる上具體案を作製する事とし午後五時散會す。

其 他 記 事

○土木學會誌第19卷第8號は昭和8年8月24日發行成規の手續を了し翌25日之を各會員に配布せり。

○昭和8年8月中に於て入會の手續を了し名簿に發録したる者下記の通り（○印は轉格を示す）

會 員 池 本 泰 兎君

准 員 内 村 修君

○小 林 賢 治君

○我 孫 子 享 一君

○東 村 一 郎君

○鐵 靖 司君

○山 本 三 郎君

○笠 谷 孝君

牧 野 憲 一君

學 生 員 千々和 太郎君

○有 田 直 助君

○四 十 万 小 祐君

○伊 藤 日 吉君

○美 安 和 夫君

○後 藤 正 美君

○鎌 田 正 義君

仲 義 夫君

菊 地 隆君

○加 藤 清 次 郎君

○安 田 恒 夫君

○河 村 長 一 郎君

○友 田 清 三君

○小 倉 克 己君

○坂 本 信 雄君

矢 内 保 夫君

○神 代 正 治君

○井 内 萬 治君

○岡 部 昇君

○芝 原 信 義君

○岩 永 俊 彦君

○横 山 幹 太君

西 村 敏 夫君

○昭和8年8月中に於て寄贈又は交換を受けたる雜誌其他下記の通り。

セメントコンクリート道路第14號

東京工業大學學報第2卷第7號

建築と社會

業務研究資料第21卷第22號及第23號

建築雜誌第47輯第574號

鑄物第5卷第8號

セメント工業八月號

工業現勢第2卷第8號

滿洲電氣協會會報

日本ポルトランドセメント同業會道路部

東京工業大學

日本建築協會

鐵道省官房研究所

建築學會

日本鑄物協會

セメント工業社

東京工業大學

滿洲電氣協會

- | | |
|---|-----------------|
| 生産管理 8 月號 | 生産管理社 |
| 機械學會誌第 36 卷第 196 號 | 機械學會 |
| 港灣第 11 卷第 8 號 | 港灣協會 |
| 工學論文要録第 1 卷第 4 號 | 日本工學會 |
| セメント界彙報第 305 號 | 日本ポルトランドセメント同業會 |
| MEMOIRS OF THE RYOJUN COLLEGE OF
ENGINEERING VOL. VI NO. 3 | 旅順工科大学 |
| 造船協會雜誌第 136 號 | 造船協會 |
| 鐵と鋼第 19 年第 7 號 | 日本鐵鋼協會 |
| 工業化學雜誌第 36 編第 8 冊及同歐文綴 | 工業化學會 |
| 日本建築士第 13 卷第 1 號 8 年 7 月號 | 日本建築士會 |
| 帝國學士院紀事第 9 卷第 7 號 | 帝國學士院 |
| 鐵道技術第 7 卷第 8 號 | 鐵道技術社 |
| 工政第 161 號 | 工政會 |
| 浪速工業時報第 32 號 | 浪速工業會 |
| 明電舎ジャーナル第 9 卷第 5 號 | 守谷商會 |
| 東京土木建築業組合報第 6 卷第 8 號 | 東京土木建築業組合 |
| 會務彙報第 21 號 | 日本土木建築請負業者聯合會 |
| 電氣學會雜誌第 541 號 | 電氣學會 |
| 造路提要 | 内外工業新聞社 |
| 土木試驗所報告第 24 號及同號附録 | 內務省土木試驗所 |
| 日立評論第 16 卷第 8 號 | 日立評論社 |
| 衛生工業協會誌第 7 卷第 8 號 | 衛生工業協會 |
| 滿洲の電氣事業 | 滿洲電氣協會 |
| 東京工業大學々報第 8 卷第 8 號 | 東京工業大學 |
| 特種鑄鐵ニハド | 日本ニツケル情報局 |
| 帝國鐵道協會會報第 34 卷第 8 號 | 帝國鐵道協會 |
| 建築と社會第 16 輯第 9 號 | 日本建築協會 |
| 造船協會雜誌第 137 號 | 造船協會 |
| 製鐵業參考資料 | 日本鐵鋼協會 |
| 工學部紀要第 3 冊第 3 號及第 4 號 | 北海道帝國大學 |
| 昭和 7 年度研究事項報告目錄 | 製鐵所研究所 |
| 工學 239 號 | 東京工學社 |
| 鐵と鋼第 19 年第 8 號 | 日本鐵鋼協會 |
| 工業現勢第 2 卷第 9 號 | 東京工業大學 |
| 港灣第 11 第 9 號 | 港灣協會 |
| 都市問題第 17 卷第 3 號 | 東京市政調査會 |
| 業務研究資料第 21 卷第 24, 25 號 | 鐵道省官房研究所 |
| 日本鑛業會誌第 49 卷第 580 號 | 日本鑛業會 |

寄稿に関する注意事項

- (1) 御寄稿は成るべく本會の原稿用紙を用ひ横書きとすること、原稿用紙は御請求次第送附す。
- (2) 御寄稿は止むを得ざる場合の外は成るべく本會の原稿用紙 120 枚（本會誌 30 頁）程度とされたし、若し前記頁數を超過する場合は適宜其の程度に縮少を御願ひすることもあるべし。
- (3) 假名は平假名とし、數字はなるべくアラビヤ文字を用ひられたし。
- (4) 歐字は特に明瞭に認むること。
n と u, u と v, r と v, a と α, r と γ
其の他頭字と小字とを判然たらしむる事。
- (5) 原稿には必ず冒頭に英文表題及内容梗概を添附されたし。
- (6) 附圖附表に就ては次の各項に御注意ありたし。
 - (イ) 圖面はその儘縮寫し得る様にトレーシング・ペーパー、オイル・ペーパー、トレーシング・クロス等とす。
 - (ロ) 凡て墨色を用ひインキ類或は彩色を施さざる事。
 - (ハ) 方眼紙は青罫のものを用ひ（黃色、赤色の罫は使用せざる事）縦横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置かれたし。
 - (ニ) 圖表中の文字、數字は特に大きく肉太に書し縮寫したる後明瞭たらしむる事。
 - (ホ) 圖表類は製版の都合上可なり汚損するものと豫め御含み下されたし。
- (7) 寫眞は特に明瞭なるものを送られたし。
- (8) 講演、論說報告の各欄に掲載の分には抜刷 20 部を寄稿者に贈呈するものとし、尙寄稿者の希望に依り實費にて御要求に應ずる事あるべし。
算式其の他の記し方大體標準。
- (1) 本文、文字間に算式を挿入する場合には次の如く記すこと。 a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避けること。 $(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+b}{c+d}$ を避けること。
- (2) 獨立したる列に算式を記す場合は次の如く記すこと。 $\frac{1}{3}a$ と書き $\frac{a}{3}$ を避けること。 $\frac{1}{2}(a+b)$ と書き $\frac{a+b}{2}$ を避けること。 $\frac{a}{b+c/d}$ と書き $\frac{a}{b+c\frac{1}{d}}$ を避けること。
- (3) 千以上の數字は 53 247 000 の如く 3 つ單位に間隔をあけること。
- (4) 名數は次の如く記し括弧の中の様を書くことを避くること。
83.4 尺（八丈三尺四寸）、7 吋（七吋）、35 錢（三十五錢）、13.56 圓（十三圓五十六錢）、1~4 時間（一乃至四時間）、88 326 噸（八萬八千三百二十六噸）、1931 年 1 月 1 日（千九百三十一年一月一日）。

新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配布致すべきに付其の以前の會誌御希望の場合是一部に付下記金額振替口座東京一六八二八番に拂込み用紙通信欄に其旨記入請求せられたし

殘 部 内 譯

第五卷一號二號	一 部	金	壹	圓	錢
第六卷六號	同	金	壹	圓	五
第七卷二號三號四號	同	金	壹	圓	五
第八卷一號	同	金	貳	圓	錢
第九卷一號二號三號五號六號	同	金	貳	圓	錢
第十卷二號三號四號五號六號	同	金	貳	圓	錢
第十一卷二號	同	金	貳	圓	錢
第十二卷二號三號五號六號	同	金	貳	圓	錢
第十三卷二號三號六號	同	金	貳	圓	錢
第十四卷一號二號三號四號五號六號	同	金	貳	圓	錢
第十五卷一號二號三號四號五號六號	同	金	壹	圓	錢
同 七號八號九號十號十一號十二號	同	金	壹	圓	錢
第十六卷一號二號三號四號五號六號	同	金	壹	圓	錢
同 七號八號九號十號十一號十二號	同	金	壹	圓	錢
第十七卷一號二號三號四號五號六號	同	金	壹	圓	錢
同 七號八號十一號十二號	同	金	壹	圓	錢
第十八卷二號三號四號五號	同	金	壹	圓	錢
同 六號七號八號九號十號十一號	同	金	壹	圓	錢
第十九卷一號二號三號四號五號六號七號八號	同	金	壹	圓	錢
東京市内外交通に關する調査書	同	金	拾	圓	錢
震害調査報告書(一、二、三)	同	金	拾	圓	錢
應用力學聯合大會講演集	同	金	壹	圓	錢

本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の住所の不明なときは會誌の配布を始め其他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等に御不在となるも會費支辨には差支なき様御配慮相成たし

會 費 納 付 に 付 注 意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し是非御支拂願度事若し此の集金書へ十五日間中三回の取立金支辨なき場合は最寄郵便局に就き本會振替口座東京一六八二八番に(拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事) 御拂込相成度尙會費一時納付の御豫定又は其の他の都合に依り支辨なき場合は直に御通知相煩度

朝鮮滿洲の一部及び青島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けざるときは爲替其他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會費年額	自一月至四月 第一期分二月徴收	自五月至八月 第二期分六月徴收	自九月至十二月 第三期分十月徴收
會 員	金拾八圓	金六圓	金六圓	金六圓
准 員	金拾貳圓	金四圓	金四圓	金四圓
學 生 員	金七圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢

新に入會したるものは月割算として入會の翌月集金を發す

會 費 未 納 に 付 注 意

會費は從來年額を第一期第二期第三期に分割し毎年二月六月十月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して放なく支辨を拒絶し尙他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滞納者として遺憾ながら規則第十三條第一項に依り遂に會誌の配布を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右様のことなき様特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

會 誌 未 着 の 場 合 の 注 意

會誌は毎年毎月十五日(印刷又は原稿等の都合に依り遅延する事あり)に發行し漏なく配布すべきに付未着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ヶ月經過して照會せらるゝ尙あるも斯くては殘部皆無となり遺憾ながら配布不可能のことあるべきに付御留意相成たし

會 報

第十九卷第九號 昭和八年九月

編輯委員會

第八回編輯委員會は 8 月 14 日午後 2 時より開催せられた。本日の議題は第十九卷第七號討議依頼先の決定、第九號に討議及特許抄録の追加、第十號登載論文の決定、論説報告及彙報の謝禮決定等に互り大體別項の通りであるがその外次の様なことが議せられた。

特許抄録に對する謝禮 前號に報告した通り本欄は主として准員工學士 吉藤幸朔君が擔當せらるゝ様草間委員長より同君に依頼し快諾を得たのであるが應分の謝禮を呈することに就て種々の議論があつたが結局毎月登載せらるゝのであるから毎月薄謝を呈することゝし、この支出の可否に就ては主事に諮る事となつた。

論説報告に對する謝禮 前回の決議に基き文房具商より下記見本を當日取寄せ色々協議したが之等の品の内著者の希望せらるゝものを贈ることが最も有意義であるから一應内意を問合せたる上贈呈すること尙適當箇所に「贈土木學會」と記入し、謝禮金額より本品價格を控除した残額は書翰券にて贈呈することゝなつた。

記

インク・スタンド	スライド・ルール
ライティング・セット (紙切ナイフとペン軸)	ナンバリング
萬年筆セット (萬年筆とシャープ・ペンシル)	シガレット・ケース
萬年筆	紙綴器
硯 箱	ブック・エンド
鋼製書類整理箱	木製書類整理箱

維新以前日本土木史編纂委員會

昭和 7 年 9 月本委員會の創立を見しより委員會を開催すること 10 回にして未だ一箇年を経過せざるも我學會事業の一たる土木史編纂事業は漸次進捗の域に進みつゝあるは誠に慶賀の至りに堪へぬ次第である。これ一重に關係各委員の御努力と多大の御後援に依る所と深く感謝の意を表し度い。殊に熱心なる方々には史料を數回に互り精細なる調査を遂げられ或は特定の事項に就き御回答を煩はすことあるに際しては御多用中にも係はらず早速に調査を遂げられ史料御送附を煩はす等誠に深謝の至りに 不堪茲に紙上を以て重ねて厚く御禮を申述ぶる次第である。

本委員會創立以來の概要に付き少しく報告旁々記述するならば既に 7 月の委員會の報告中累計報告として各委員へ御報告致せし如く昭和 7 年 9 月本委員會設置以來昭和 8 年 8 月 15 日現在に於て全國 47 府縣道廳中、史料の御寄贈或は貸與を受けしもの北海道廳以下 28 府縣にして、即ち北海道廳、兵庫、山口、山形、岐阜、大分、富山、佐賀、石川、徳島、廣島、沖繩、大阪、長崎、栃木、愛媛、島根、宮城、奈良、香川、鳥取、愛知、静岡、京都、大分、福井、岡山等の各府縣にして品目 37 點 (寫眞原板を除く) に達してゐる。右の内資料なしとの回答に接せしもの 3 縣を含む。

次に全國市數 113 の内史料の御寄贈或は貸與を受けしもの 49 市、即ち西宮、松本、飯塚、水戸、戸畑、大阪、京都、静岡、四日市、福山、前橋、横濱、名古屋、岡崎、都城、長岡、金澤、千葉、仙臺、高松、山形、盛岡、

島根（以下略）等の各市にして品目 5 點、内 19 市よりは資料なしとの回答に接してゐる外に常務委員中よりの貸與資料 49 點に及んでゐる。而してこの土木史編纂事業に於て目下の處材料としては多少豊富に集まり居れるも集まりし史料の撰擇或は未だ集まらざる當方希望の史料蒐集等寧ろ完成への努力は今後にある可く各委員の御努力も一層倍加することと思ふのである。曩に名井前會長の委員會に於ける説明の如くに土木史としては未だ一般的に纏りたるもなく、随つて前人未到の地の開拓と同じく、而もそれは場所、事項、年代に於て甚だ廣範圍に亙ることであつて本學會事業の一として右のものゝ纏る迄には尙相當の時日を要することであらう。

歴史とは時間の秩序の上に描ける我自らの相であると鹿千木博士の言の如く、而して又歴史は決して過去の記録に非ず寧ろ將來に向つて飛躍し突進せしめる足場を與へるものなりとあるが如く或は近時國史教育の徹底上或は之を國際的に見るも本邦土木界に於ける我自らの相を眺めることゝ、この意義ある計畫に對し今後も尙一層の御助力を惜まれざらんことを附加してこの稿を終ることゝする。今や期は將に旬日を出でずして讀書の候に入らんとす我編纂事業も一層の進展を見ることであらう。各員の御努力を期待して止まぬ次第である。

雑誌閲覽に就ての會告

下記の雑誌は本會事務所に備付置候間御希望の向は下記時間内御随意に御閲覽相成度候。

閱 覽 時 間

日曜日及祭日休，土曜日自午後一時至同四時，其他自午後四時至同八時。

但し役員會，委員會等開催の日は御斷り致すこと有之哉も計られず候間豫め御承知置被下度候。

備 付 雜 誌

衛生工業協會誌
 機械學會誌
 業務研究資料(鐵道大臣官房研究所)
 建設設
 建築雜誌
 工學部紀要(東大, 京大, 九大)
 工學報告(東北帝大)
 工業化學雜誌
 工事畫報
 工 政
 工 簿

國際築建時論
 造船協會々報
 帝國鐵道協會々報
 鐵と鋼
 電氣學會誌
 電氣製鋼
 土木建築雜誌
 日立評論
 名古屋工業會々報
 滿洲技術協會誌
 其他寄贈雜誌

廣 告 料 (東京市京橋區築地上柳原町八番地 東京第一通信社取扱)
 電話京橋 872 番 振替東京 3069 番

普通廣告 一回一頁 40 圓 一回半頁 25 圓

指定廣告	裏表紙三面對向 及廣告初頁	一回一頁 60 圓
	裏表紙三面	一回一頁 150 圓
	色アート	一回一頁 75 圓

- 指定廣告は凡て一箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす
- 會員自身の廣告に對しては總て上記料金の一割引とす
- 同一廣告の連續掲載申込に對しては半箇年分五分引，一箇年分一割引とす
- 廣告に寫真版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす